

# 日英語表現の対応

嶋 村 誠

## I. はじめに

日本は、明治維新の頃から外国文化の摂取に力を注ぎ、盛んに翻訳がなされた結果、現在では世界でも有数の翻訳国になっている。コロンビア大学の日本文学の教授であり、これまで数多くの日本文学作品を英訳している Donald Keene 氏は学生に向けて次のように語るのだそうであるが、日本の翻訳事情の一端を如実に物語っている。

- (1) 「もし君たちが世界のありとあらゆる文学作品を読みたいと思うなら、日本語を勉強しなさい。日本語を勉強することが、世界各国の主要な文学作品に触れる最適の手段なのです」(國弘 1970:38)

このようにまで言われる翻訳王国においてなされてきた日英語の対照分析は、元来外国語教育に貢献することを狙いとして始められたものであるが、生成理論が盛んな今日では、言語間に普遍的にみられる言語特性と、各言語に備わる独自の特質を探る有効な手段としても用いられている。

ところで日本語の特質について書かれたものの中に次のような考えがみられる。

- (2) a. 「日本語ではとかく物事が『おのずから然る』やうに表現しようとする傾向を示すのに対して、英語などでは『何者かがしかする』やうに、さらには『何者かにさうさせられる』かのやうに表現しようとする傾向を見せてゐる…」(佐久間 1941:214)

- b. 「ヨーロッパ風の表現における…特徴を、かりに人間本位的といふならば、日本語におけるものは、むしろ自然本位的あるひは非人間的ともいへる…」(佐久間 1941:211)

そこで、本稿ではこのような見解を手がかりにして、英語と日本語のあいだに見られる対応型について実例を通して考察してみたい。その資料としては、日本語による原作とその英語訳、および英語による原作とその日本語訳を使用する。(例文の末尾につけた出典を示す略号については、本論の最後につけたリストを参照されたい。)

## II. 対照語彙論

言語が異なれば語の意味領域もずれているのが通例であり、語と語が一対一に対応しているのはわずかに化学物質の学名くらいのものであろうと言われている。そこで言語間における語の意味の異同を調べる必要が出てくるわけであるが、國廣(1967)、服部(1968)、鈴木(1973)、影山(1980)等により、lipと「くちびる」などの人体部位の名称、温度形容詞、開閉を表す動詞などいくつかの語についてすでに明かにされている。ここでは、warmが不快感を含んで用いられ、日本語の「あたたかい」ではなくて「暑い」の意味領域に食い込んでいる例を示すにとどめておく。

- (3) a. In Akinosuké's garden there was a great and ancient cedar-tree, under which he was wont to rest on sultry days. One very warm afternoon he was sitting under this tree with two of his friends, fellow-gōshi, chatting and drinking wine, when he felt all of a sudden very drowsy, . . . (DA, 158) [例文の下線は嶋村。以下同様]
- b. 安芸之助のうちの庭には、大きな古い杉の木があって、暑苦しい日など、彼はよくその下で、休んだものであった。ある暑い日の午後のこと、安芸之助が郷土仲間の二人の朋輩と、この木のした

に坐って、談笑しながら酒をくみかわしていると、急にひどく眠気がさしてきた。(田代訳、99)

warm の直前に on sultry days (暑苦しい日、蒸し暑い日) とあることから見て、この warm は不快感を伴う日本語の「暑い」の意味領域に食い込んだ用法とみられる。

### Ⅲ. 対照表現論

#### 1. 肯定と否定

日英語を表現論の立場から対照してみると、英語では肯定的に表現するところを、日本語では見方を転換して裏返しにして否定的な表現を用いる、ということがあげられる。その実例を示しておこう。

- (4) a. And that was all. (IHP, 55)  
 b. ほかにはなにもなかった。(永井訳、73)
- (5) a. ... when starvation conquered fear and drove him, quaking, out of hiding. (IHP, 66)  
 b. 恐怖心が空腹に勝てなくなって震えながら隠れ場所から出て行ったときに... (永井訳、89)
- (6) a. Oh well, I suppose it'll hold three more. (IHP, 47)  
 b. しかし、あと三人ぐらい乗っても沈むことはないでしょう。(永井訳、61)
- (7) a. He was only half awake. (OHB, 1)  
 b. 子供はまだ半分寝ぼけている。(中野訳、7)

(7b) には否定辞が含まれていないけれども、(7a) と (7b) を比較すると、半分目覚めていることに注目して肯定的に表現している英語とは対照的に、日本語では、まだ半分目覚めていないことの方に注目しているのであるから否定的な表現をしていると考えることができる。

## 2. 比較級

日本語には語形変化による比較表現がないため、(8b)のように形の上では非比較表現と同じになったり、英語なら劣等比較級によって表現するところを、(9b)のように否定形で代用したりする。

- (8) a. It was the Howdens' favourite kind of music; the heavier classics seldom appealed to them. (IHP, 35)  
 b. その手の音楽がハウデン夫妻の好みで、重厚なクラシック音楽はあまり喜ばなかった。(永井訳、44)
- (9) a. Cabinet Ministers and MPs fared even less well. (IHP, 37)  
 b. 閣僚や国会議員にいたってはさらに恵まれなかった。(永井訳、47)

## 3. 線と点

英語ではある発端を契機とした継続的な状態や動作をそのまま線的にとらえながら継続として表現するが、それに対して日本語ではその継続状態の開始を示す起点を引き合いに出して事象を点的にとらえながら表現するという一面がある<sup>1)</sup>。

- (10) a. His mother was dead, his father he had never known. (IHP, 49)  
 b. 母は死にましたし、父は全然知りません。(永井訳、50)
- (11) a. 'There will be time, I promise you.' (IHP, 11)  
 b. 「いまに時間はできるさ、約束するよ。」(永井訳、10)

(10a) では 'was dead' という線的な形容詞表現によって故人であることが表され、(10b) では死んだという点的な出来事に言及することによって故人であることが表されている。

## 4. AS (接続詞)

as という接続詞には、when や while よりも強く「同時性」を表す用法があ

1) このことは國廣(1982)にも指摘されている。

るが、as の節と主節の事象が同時に起っていることを表すこの用法を翻訳に生かそうとする立場から日英語を対照してみると、いわゆる学校文法では見ることのできない実に多くの対応型のあることがわかる。以下それらのいくつかを拾ってみよう。

英語の as 節は主節を修飾する従属節の形をとっているが、翻訳の実例にはそうした修飾構造にこだわらない (12) (13) のような対応法も見られる。

- (12) a. Captain Jaabeck met the three men as they came aboard. (IHP, 48)  
 b. ヨーベック船長は乗船してきた三人を迎えた。(永井訳、63)
- (13) a. He saw the evening sun as he had seen it after the night with Mrs. Ota. . . (TC, 65-66)  
 b. 北鎌倉の宿で太田未亡人と泊った帰りの電車から見た夕日が、菊治の頭にふと浮んだ。(川端『千羽鶴』、73)

これは、高橋 (1980) が「入れ子式」と名付けている対応方法であり、as 節内の述語に、同じ節内の主語名詞を連体修飾させる形にしたもので、いろいろな文に応用が効く。英文を日本文に翻訳する立場から見ると、(12) (13) のように、as 節の主語と照応的な名詞が主節内に存在する場合、あるいは (14) - (16) のように as 節の主語と照応的な名詞を主節内に補充することが可能な場合に有効な方法の一つであると思われる。

- (14) a. A Mountie in scarlet dress uniform saluted smartly as the Prime Minister and his wife alighted. (IHP, 12)  
 b. 深紅の儀礼用制服を着た一人の騎馬警官が、車から降り立った首相夫妻に敬礼した。(永井訳、11)
- (15) a. He avoided several groups whose members looked up expectantly as he passed, smiling and moving on. (IHP, 22)  
 b. 彼は通りすぎる自分に期待の目を向けるいくつかのグループを避

けて、微笑を浮かべながら奥へ進んだ。(永井訳、26)

- (16) a. As she measured out the tea, a tear fell on the shoulder of the kettle. (TC, 72)  
 b. 杓を持つ夫人の涙が、釜の肩を濡らした。(川端『千羽鶴』、80)

つぎに、日英語がともに同種の修飾構造をとっていても、同時性を表現するためのさまざまな対応型が見られることを示しておこう。

- (17) a. The buzz of conversation lessened perceptibly as the Prime Minister and his wife entered. . . . (IHP, 13)  
 b. 首相夫妻が部屋に現れると同時に話し声が目立って低くなった。  
 (永井訳、12)
- (18) a. Even now, as he walked through the temple grounds and heard the chirping of birds, those were the fantasies that came to him. (TC, 9)  
 b. 今も寺山の小鳥のさえずりのなかを歩きながら、そんな妄想もした。(川端『千羽鶴』、12)
- (19) a. A Shower swept toward me from the foot of the mountain, touching the cedar forests white, as the road began to wind up into the pass. (ID, 8)  
 b. 道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。(川端『伊豆の踊子』、9)
- (20) a. As the manservant left, Lexington sipping rye and water, Aaron Gold, Postmaster General and only Jewish member of the Cabinet, joined them. (IHP, 14)  
 b. 給仕が立ち去り、レキシントンがライ・ウィスキーの水割りを飲んでいるところへ、郵政相で閣僚中唯一のユダヤ人であるエアロン・ゴールドがやってきた。(永井訳、15)

- (21) a. With quiet, firm dignity, preceded by an aide as the women guests curtsied and their husbands bowed, their Excellencies withdrew. (IHP, 29)  
 b. もの静かな、確固たる威厳をたたえて、婦人客が膝を折り、その夫たちが頭を下げてお辞儀をするなかを、副官に導かれながら、総督夫妻は退出した。(永井訳、36)
- (22) a. Stubby Gates nudged Henri Duval as the group, led by the captain, passed by. (IHP, 49)  
 b. 船長に率いられたグループが通りすぎるときに、スタッピー・ゲイツがアンリ・デュヴァルの脇腹をこづいた。(永井訳、64)
- (23) a. His head grew heavy as he read the newspaper, ... (TC, 89)  
 b. 新聞を読んでいるうちに頭が重くなったので、… (川端『千羽鶴』、100)
- (24) a. Chikako ignored the remark and talked on, as memories came to her, of Kikuji's father and the cottage. (TC, 54)  
 b. ちか子はそれを聞き流して、菊治の父の生前、この茶室がどんな風に使われたかを、思い出すままにしゃべり続けた。(川端『千羽鶴』、60)
- (25) a. As she fell forward in the act of throwing the Shino, she seemed herself about to collapse against the basin. (TC, 144)  
 b. 文子がうずくまって茶碗をわった姿でそのつくばいの方へ崩れかかったからだった。(川端『千羽鶴』、162)
- (26) a. ... once a man was eclipsed in a contest for power, his stature, it seemed, grew less as time went on. (IHP, 32)  
 b. …いったん権力争いから脱落した人間の地位は、時間の経過とともに低下してゆくかに見えた。(永井訳、40)
- (27) a. His voice sharpened as conviction took hold. (IHP, 39)  
 b. 確固たる信念が湧いてくるにつれて彼の声が鋭くなった。(永井

訳、50)

- (28) a. The girl stood up as he opened the door. (TC, 35)  
 b. 菊治が応接間の扉をあけると、令嬢は椅子を立った。(川端『千羽鶴』、38)
- (29) a. The bargain struck had been kept on both sides even though, over the years, as James Howden's prestige had risen, Harvey Warrender's had steadily declined. (IHP, 32)  
 b. それから何年かたつうちにジェームズ・ハウデンの威信は大いに上がり、ハーヴェイ・ウォレンダーの威信はじわじわと低下したものの、取引きの条件は双方によって守られた。(永井訳、40)
- (30) a. Kikuji turned to face her, and stood up as he did so. (TC, 73)  
 b. 菊治は振り向いたのをしおに立ち上がった。(川端『千羽鶴』、82)

なお、(31) と (32) を比較すると、英語の方は as 節と主節の後先の順序が逆であるにもかかわらず、日本語では (29b) と (30b) とが節の接続方法も節の順序もどちらも同じであるということからみて、as 節と主節の修飾・被修飾の関係は薄くて、同時性を表す機能のほうが強いことがわかる。

- (31) a. As the shyness deepened, the flush spread to her long, white throat. (TC, 37)  
 b. 令嬢のはにかみの色はなお濃くなって、色白の長めな首まで染まって来た。(川端『千羽鶴』、42)
- (32) a. Their white light took on a yellow tinge as evening became night. (TC, 114–115)  
 b. 白っぽい螢の火はいつとなく黄みを加えて、日も暮れた。(川端『千羽鶴』、129)

このほか日本語の形はさまざまであっても、「同時性」を含んでいる点に注目して英語の as 節で表現できることを示す例を付記しておく。

- (33) a. 'It's good to see you.' There was nostalgia in his voice as he came up to her. (TC, 127)  
 b. 「いらっしゃい」  
 と、菊治は親しげに近づいた。(川端『千羽鶴』、144)
- (34) a. 'What's the matter?' he almost shouted as he came up to her. (TC, 56)  
 b. 「ああ、どうなさった」  
 と、叫ぶように近づいた。(川端『千羽鶴』、62)
- (35) a. ... and now, as he knelt before her ashes and asked what had made her die, he thought he might grant for the moment that it had been guilt. (TC, 70-71)  
 b. …今菊治は骨の前に坐って、夫人を死なせたことを思っても、それが罪だとすると、やはり罪と言った夫人の声がよみがえって来るのだった。(川端『千羽鶴』、79)
- (36) a. He went out just as I came in.  
 b. ぼくと入れちがいに出て行った (江川 1964 : 354)

## 5. 句と節

つぎに、英語では節ではなくて句を用いることによって引き締まった圧縮した表現にすることが好まれるのに対して、日本語では節が多用されることに触れておこう。

### 5.1. 前置詞と動詞

英語の前置詞表現が、日本語では動詞をおぎなって表現する形に相当することがある。つぎの例の *up, through, into* がそれぞれ「をのぼる」「を通る」「に入る」という日本語表現に対応している点に注目されたい。

- (37) a. They were led from the high pillared entrance hall up a rich red-carpeted marble stairway, through a wide, tapestried corridor and into the Long Drawing Room where small recep-

tions such as tonight's were usually held. (IHP, 12)

- b. 彼らは高い列柱の立ち並ぶ玄関ホールから、高価な赤絨毯を敷きつめた大理石の階段をのぼり、タペストリーを飾った幅広い廊下を通って、今夜のような小人数のレセプションに使われることの多い「<sup>ロング・ドロッキング・ルーム</sup>長方形の客間」に入った。(永井訳、12)

## 5.2. 副詞と動詞

副詞のなかには、それだけで動詞に相当する意味を持ったものがある。(38)の off は take off に相当し、(39)の off to は leaves for に相当する働きをしている。短い語であるために新聞の見出しなどにも活用されるわけである。

- (38) a. Helping him off with them [a heavy overcoat and scarf], Milly had been shocked to see how un-well the old man appeared. . . . (IHP, 76)
- b. …老人がコートを脱ぐのを手伝ってやりながら、ミリーは彼がひどく健康を害しているように見え…ショックを受けた。(永井訳、102)
- (39) a. Anti-Nuke Group Off to U. S.
- b. 反核団体米国へ出発

## 5.3. 名詞と動詞

英語には、動詞から派生した名詞を用いることによって、その名詞を際立たせながら簡潔な英語らしさを生み出すいわゆる名詞構文があり、(40a)はその一例である。こういう名詞構文に対応する自然な日本語は、動詞を用いて表現されるのがふつうである。なお、英語の名詞構文の例は10節でも取り上げる。

- (40) a. He had an irrational flash of jealousy at the thought of Milly Freedeman alone with someone else. . . . (IHP, 19)
- b. 彼はミリー・フリーデマンがほかの男と二人きりであるということを考えただけで、理屈に合わない嫉妬を覚えた…(永井訳、21)

#### 5.4. 限定修飾構造と命題

英語の‘A(限定形容詞)+B(名詞)’が、日本語では、たとえば‘B(主語)+A(叙述形容詞)’に変えて命題のかたちにしたものが対応することがある。

- (41) a. ... probably, Howden thought, the result of too much time at a desk in Ottawa and too little at sea. (IHP, 12)  
 b. おそらくオタワの役所勤務の時間が多すぎて、海に出る時間が少なすぎるせいだろう、とハウデンは思った。(永井訳、11)

#### 6. 二項関係

ある事象を表現する際に、英語の目的語の取り上げ方が日本語の場合と異なるように思われることがある。(44)はその一例である。

- (42) a. Without speaking he had locked the door and, taking Milly by the shoulders, turned her towards him. (IHP, 71)  
 b. そして無言でドアに鍵をかけ、ミリーの肩に手をかけて自分のほうを向かせた。(永井訳、96)

(42)において、日本語では「ミリーの肩」という全体で一つの名詞句が形成されているが、周知のとおり英語では(42a)のようにMillyとthe shouldersとを分けて表現することもできる。一見まわりくどいようであるが、ミリーを自分のほうに向けることをねらっているからこそ手をかけるのであって、肩がねらいの的ではないという点からすれば、英語は極めて合理的な表現をしていることになる。

#### 7. HAVE 言語と BE 言語

言語類型学的にみて、所有の概念を表現する特別の語が備わっている言語と、存在を意味する表現で所有の概念を表現する言語とがあり、英語の所有と存在を表す HAVE と BE によってこのことを象徴的に表そうとするねらいから、前者の型を HAVE 言語と呼び、後者を BE 言語と呼んで区別することがあ

る<sup>2)</sup>。

例えば、典型的な HAVE 言語としての英語では、(43a) のように、文構造の上で Mary が所有者として表現されているが、(43b) の日本語では「メアリー(に)は」という存在場所として表現されている。

- (43) a. Mary has two children.  
 b. メアリー(に)は子供が二人ある [いる].

こうした英語の所有文の主語としては、(43a) や (44a) のような人間だけではなくて、(45a) のように無生物も所有者としての扱いを受けることができる。無生物にも人間と同様の資格を与え、「何者かがしかする」(本稿の冒頭にかかげた佐久間(1941)からの引用を参照のこと)という表現に引き込んでいるわけであるから、(45a) は人間中心の表現をすることを好む英語の特徴が現れている表現の一つであると考えることができよう。一方、日本語の方は、(44b) も (45b) も内容的には人間に関することでありながら、「非人間的」な、状況指向型の表現になっている。

- (44) a. He had not intended to become heated but he had a sailor's contempt for shorebound officialdom. (IHP, 50)  
 b. 彼はむきになるつもりはなかったのだが、船乗りの常で陸上の役人どもを目の敵にするようなところがあった。(永井訳、66-67)
- (45) a. Richardson laughed, though the laugh had a hollowness. (IHP, 80)  
 b. リチャードソンは声をたてて笑ったが、その笑いにはうつろな響きがあった。(永井訳、108)

5.4 節でみた英語の限定修飾構造にからむ対応型を利用した (46b) のような対応も有効である。

2) HAVE 言語と BE 言語の区別については、Issatschenko (1974), 池上 (1981), Mathesius (1975) などを参照のこと。なお、英語の have の各種用法と分析については、Bach (1967), Bowers (1981) が詳しい。

- (46) a. His face was small and white and he had tight lips. (K, 24)  
 b. 顔は小さく色白で口もとがひきしまっていた。(大久保訳、181)

つまり、英語の‘A(名詞)+have+B(限定形容詞)+C(名詞)’を日本語では‘A(名詞)は+C(名詞)が+B(叙述形容詞)’に変えて、「象は鼻が長い」式の表現にするわけである。

### 8. 人間指向型と状況指向型

前節でも触れたが、英語が人間中心的な表現を前面に押しだそうとするところを、日本語では状況中心の表現にしようとする傾向がある。引き続き英語の所有文から例を拾ってみよう。

- (47) a. ‘But I’ve had it [narcissism] for years.’ (IHP, 10)  
 b. 「それなら何年も前からわたしに取りついているさ。」(永井訳、9)
- (48) a. ‘We haven’t many left.’ (IHP, 36)  
 b. 「もういくらも残ってないわ」(永井訳、46)
- (49) a. Faded paintwork had great patches of rust extending over super-structure, doors, and bulkheads. (IHP, 54)  
 b. 色褪せたペンキのあちこちに大きな錆が浮きだして、船の上部構造やドアや隔壁に拡がっていた。(永井訳、71)

このような傾向は英語の所有文とそれに対応する日本文の間だけに見られる特徴ではない。窓口の係員が切符の売り切れを告げるときの(50)などにも同じ傾向が見られる。

- (50) a. We are sold out.  
 b. 切符は売り切れました。

### 9. 自動詞と他動詞

英語では自動詞によって表現するところを、日本語では他動詞によって表現

せざるを得ないものがある。そういう場合に、英語において自動詞表現の主語になっているものが、日本語の動詞の対象を表すものに対応していると考えられることが多い。つまり、基本的には英語の SV 構文に日本語の OV 構文が対応し、日英語で同じ名詞が主語に選ばれているときには、英語の自動詞文が日本語の受け身文と対応することになる。

- (51) a. ... and now the *Vastervik* [a ship] was berthing gently, its big hook dragging like a brake on the silt-layered, rock-free bottom. (IHP, 46)  
 b. …いまや《ヴァステルヴィク》は岩のない沈泥層の海底にその大きな錨爪をブレーキのように引きずりながら、ゆったりと停泊していた。(永井訳、60)
- (52) a. It [the ship] made fast at La Pointe Pier. . . . (IHP, 9)  
 b. 同船は…ラ・ポワント埠頭に繫留された。(永井訳、7)
- (53) a. ‘Yes, I’d heard the invitation had gone.’ (IHP, 17)  
 b. 「招待状が送られたことは聞いている」(永井訳、18)
- (54) a. Her husband smiled, his heavy-lidded eyes crinkling. (IHP, 10)  
 b. 夫はぼってりと厚い瞼に皺を寄せて笑った。(永井訳、9)
- (55) a. Anything else, she decided, could wait until after the holiday. (IHP, 77)  
 b. ほかの仕事は休暇あけまでのばすことにしよう、と彼女は決めた。(永井訳、104)

## 10. 無声物主語

典型的な HAVE 言語である英語では、生物のみならず、時や音声を表す名詞や、動詞から派生した名詞や、さらには抽象的な概念にも agentivity が与えられて、いわゆる無声物主語の構文が作られる。一方、日本語ではそのような名詞に agentivity が与えられないために、直訳したのでは不自然な文になる

ことが多い。英語の無生物主語が日本語からみて奇異に思われるのは他動詞が用いられていてその目的語が人間である場合が多いため、その目的語を日本語では主語に格上げして、英語の主語を副詞に格下げするなどして、英語の無声物主語の agentivity を直接表現することを避けて表現されるのが一般的である。

- (56) a. He stopped, remembering the imponderables about the future which the past two days had brought. (IHP, 11)  
 b. 彼は過去二日間の出来事のために将来の予測がつかなくなったことを思い出して、途中で口をつぐんだ。(永井訳、10)
- (57) a. A voice murmured urgently, 'Get him out of here!'  
Another answered, 'He can't go. . . .' (IHP, 28)  
 b. だれかが催促するようにいった。「彼をここから連れだせ!」  
別の声が答えた。「そうはいかん…」(永井訳、34)
- (58) a. But the glimpse of a uniform in a lighted area ahead had unnerved him. . . (IHP, 66)  
 b. だが前方の明るい場所に制服警官の姿が見えたので、急に怖気づいて…(永井訳、89)
- (59) A. Tears filled her eyes and a temptation seized her to return downstairs; to ask that for just one night, at the hour of sleep, she need not be alone. (IHP, 43)  
 b. 目に涙が溢れ、階下に戻って、せめて一晩だけ、寝るときに一人にしないでくださいと頼みたい衝動に駆られた。(永井訳、56)

## 11. 「わたり」の多少

日本語と比較すると英語の方が簡潔を旨とする度合いが強いようで、それゆえ英語では、キーワードを繰り返すことによって強調するような特別の効果をねらう場合はともかくとして、同一表現の繰り返しは極度に嫌われる。一方、日本語では繰り返しが多用され、繰り返しの部分が「わたり」あるいはリエゾン

の役目を果たすことによってその前後のつながりがスムーズになり、落ち着きを得る<sup>3)</sup>。

たとえば、(60)において、日本語では「驚く」という語が繰り返されているが、英語ではそれに相当する表現の繰り返しはない。日本語の「驚くよりも」に相当する意味は、英語ではことばによって表現されなくても自然なかたちで行間から伝わるわけである。

(60) a. 'Perhaps I shouldn't have told you all this. Has it upset you very much?'

'It's made me sad. . . .' (IHP, 41)

b. 「こんなことをきみに話すべきではなかったかもしれない。どうだ、ひどく驚いたかね?」

「驚くよりも悲しくなったわ。…」(永井訳、53)

また、これに似た現象として、文と文の論理関係を表す語を英語のなかで多用すると、幼稚な、もたついた文体になってしまうのに対して、日本語では言葉によって表現しておいた方が潤いのある安定した文体になることが多いようである。たとえば、(61a)において^印を付けた箇所には前後の文の論理関係を示す語が見あたらないが、日本語にはそうしたものが見られる。(61b)や(62b)の下線部がそれに相当するが、その部分を省いてしまうと、いかにもことば足らずな、不自然でなめらかさのない、箇条書のような文体の日本語になってしまう。

(61) a. His father was too old and feeble; ^ he thought he must tend the store in his stead. (Nida et al. 1973:15)

b. 彼の父親は、もう年老いてとても身体が弱っていた。だから彼は、自分が父に代わって店をやっていかねばならないと思った。(同上)

3) 談話構造の点から繰り返しに関して日英語を対照した研究に西光(1989)がある。

- (62) a. People like to think of their country as holding the door open for the poor and suffering. ^ It makes them feel noble. Only thing is, they'd just as soon the poor and suffering keep well out of sight when they get here, and not track lice in the suburbs or muddy up the prissy new churches. ^ No siree, the public in this country doesn't want wide-open immigration. (IHP, 28)
- b. 国民は自分たちの国が貧しい人々や苦しんでいる人々に門戸を開いているものと思いたがる。そうすればりっぱなことをしているような気分になれるからだ。ただし彼らは貧しい人々や困っている人々がこの国に入国したら、すぐに人目につかないところへ消えてくれるよう望んでいる。郊外住宅地に虱<sup>しらみ</sup>を持ちこまれたり、新しい教会を泥で汚されたりするのはごめんだと思っている。つまり、わが国の大衆は門戸を広くあけた移民政策など望んでいないのだ。(永井訳、34-35)

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

#### 資料の出典と略号

- DA: Lafcadio Hearn. 1971. *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company. 邦訳：田代三千稔訳『怪談・奇談』角川文庫, 1956.
- ID: Edward G. Seidensticker, trans. 1964. 'The Izu Dancer.' 『伊豆の踊子』(現代日本文学英訳選集1), 原書房. 原作：川端康成『伊豆の踊子』
- IHP: Arthur Hailey. 1970. *In High Places*. Pan Books. 邦訳：永井淳訳『権力者たち』新潮文庫, 1981.
- K: Ernest Hemingway. 1968. 'The Killers.' *Snow of Kilimanjaro*. Penguin Books. 邦訳：大久保康雄訳『ヘミングウェイ短編集(一)』新潮文庫, 1988.
- OHB: W. Somerset Maugham. 1915. *Of Human Bondage*. London: Heinemann. 邦訳：中野好夫訳「人間の絆」『モーム I』(新潮世界文学30) 新潮社, 1968.
- TC: Edward G. Seidensticker, trans. 1967. *Thousand Cranes*. Tokyo: Charles E.

Tuttle Co. 原作：川端康成『千羽鶴』新潮文庫，1967.

### 参考文献

- Bach, E. 1967. "Have and be in English Syntax". *Language* 43:462-85.
- Bowers, J. S. 1981. *The Theory of Grammatical Relations*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- 江川泰一郎. 1964. 『英文法解説』改訂新版. 金子書房.
- 服部四郎. 1968. 『英語基礎語彙の研究』三省堂.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- Issatschenko, A. 1974. "On Be-languages and Have-languages." In L. Heilmann, ed., *Proceedings of the Eleventh International Congress of Linguists*, Bologna.
- 影山太郎. 1980. 『日英比較語彙の構造』松柏社.
- 國弘正雄. 1970. 『英語の話しかた—同時通訳者の提言』サイマル出版会.
- 國廣哲彌. 1967. 『構造的意味論—日英両語対照研究』三省堂.
- 國廣哲彌. 1982. 「総説」國廣哲彌編『発想と表現』（日英語比較講座4）大修館書店. 1-31.
- Mathesius, V. 1975. *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis*. The Hague: Mouton.
- Nida, E. A., C. R. Taber and N. S. Brannen. 1969. *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: E. J. Brill. 沢登春仁, 升川潔訳『翻訳—理論と実際』研究社, 1973.
- 西光義弘. 1989. 「繰り返しの日英対照談話構造」『日本語の文脈依存性に関する理論的実証的研究』（昭和63年度科学研究費総合研究研究成果報告書）1-21.
- 佐久間鼎. 1941. 『日本語の特質』育英書院.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』岩波新書.
- 高橋泰邦. 1980. 「比較こそ奥義への道」『翻訳の世界』7月. 44-52.